

# 母の三回忌に合わせて組んだ、 父の生まれ故郷を訪ねて

里崎 雪

八三歳の父は総入れ歯だ。毎晩入れ歯をポリデントに浸けて休むがその時に娘の私はビックリする。私の祖母ちゃん（父にとっては母）に瓜二つだから。姉と話したことがある。「ビックリ。入れ歯はずすと祖母ちゃんそっくりだよね、同じ顔。血が繋がってないのにすごいよね」と。

父はまだ幼く記憶の無い時に岩手県二戸郡から青森県下北郡へもたらわれてきた。父は養父母を本当の父母と思い成長した。父が小学生のある日、担任に言われた。「長後君、君は長後さんの本当の子供では無いそうだね」

父は先生を叱り付けた。「何を言ってるんですか。そんなバカなこと、誰が言ってるんですか！」なんと同級生の母親たちが先生に言ったのだ。父はショックだった。本当の親と思い育ってきた小学生のある日に突然、しかも担任から事実を知らされたのだから。怒り狂った父は養父母を責めて部屋に閉じこもりしばらくは養父母に反発して暮らした。

父は岩手県二戸郡の地主の家庭に双子の弟として生まれた。当時は双子の弟は出家させられたケースは多く昔からの言い伝えに基づく理由からのようだ。父は「産みの親に捨てられた」という深い思いを持ちながら月日が過ぎた。唯一、二戸郡の故郷と父を繋ぐ存在があった。父の姉であった。養子に出された弟を思いやり大人になってから手紙をよこして故郷で双子の兄と会う機会を作ってくれた。

顔は瓜二つ。産みの父親譲りの酒豪の二人だった。再会した当時、兄は創価学会の役員。父は共産党議員。考え方も生き方も真反対の二人。いよいよ酒が回り二人とも議論をぶつけ合い、しまいには大喧嘩になり姉は「同じ顔して何で、何で喧嘩するの」と泣いた。しかし二人はそれっきり会っていない。そして数年後、繋いでくれていた姉が亡くなり、以来父の生まれ故郷とは縁が切れたまま月日が過ぎた。

子供である私たちは一度も行った事がない父の故郷。物心ついたあたりに父の出生のことを知った。私たち兄妹はそれぞれが口には出さぬが色んな思いがあったと思う。

我が家は長男、次男、長女、次女、三女、四女である私の六人兄妹だ。現在長男は行方不明。次男は晩婚で子供が無い。姉妹は嫁ぎ、我が長後家には跡取りが無い。父が引き取られた長後家は親戚付き合いが無かった。実のところ長後家の家系も分かっていない。養父は養子で養母は長後家に奉公に出दैいて一生懸命、真面目に働き長後夫人に可愛がられて長後という姓を頂いて長後うた、と名乗ったと聞いている。養母は明治時代の貧乏人だったから姓が無かったと聞いている。結局は長後家は血筋は母方しか分かっていない。

長女である姉は霊感が強く一時期、宗教的なものにハマった人でもあり、「ご先祖様の供養」に深くこだわり実践している。その姉が父自身は生まれ故郷のことは無頓着に来て何も分かっていない中、戸籍謄本を基に調べて二戸に来る数日前にやっと父のご先祖様らしき墓がありそうだと行ってきた。私は以前父からこんな言葉聞いていて深く心に残っていた。「二戸の墓参りに行けって言うが、何で捨てられた俺が、何でこっちから行かなきゃいけない、相手から優しい言葉の一つも無かったのにこっちからいく必要は無い」と怒っていたからだ。なので今回私は父に二戸行きの計画は一言も言わずに連れてきた。父の故郷探訪は全て姉に任せていた。さて二戸へたどり着き荷物をトランクから出しホテルへ運びながら私は「父さんには何て言うの？ 私、父さんには一言も言ってないよ」姉が「さっきお父さんに聞いたの、生まれ家のお墓が見つかったんだけど……どうする？ お墓参りに行きたいと思うんだけどって聞いたら、うん、行きたいってお父さん言ったのよ」私は「そう、なら良かった。私は言えなくてだまって連れてきたのよ」明日は次女も合流して父、長女、次女、私の四人で父のルートである猪股家のお墓参りに行くのだ。私たち子供にとっては初めて、父のルートである二戸へ来たのだ……。熱いものが胸に寄せて来た。父は二五年ぶりに二戸へ来たと言った。双子の兄と喧嘩別れした以来という事になる。

実は私は長女である姉とは考え方が合わず一度大喧嘩をした。しかし父を引き取り同居している私は姉と父を会わせる責任もあると思ひ直し、仲直りしていたので今回の二戸行きを承諾した。こうして現地に来て父もスナリ応じた事も導かれた

ようだと感じた。その晩父は晩酌し、大の字でグーグー寝ている。私はその側でまだ起きていていよいよ明日、父の生まれ家の墓参りができる。先祖に会える。とドキドキした。寝ている父を見て考えた。養子に出されたまま生まれ家からは何の沙汰ももらわなかった父にとっては？ 父の心情は私には分からなかった。

翌日昼に次女を駅に迎えに行きお供え物などを買い物して向かった。尋ね人の住所を確認しつつ車を走らせる。山の中に進んでいく。途中何度か尋ねながらやっと辿り着いた。静かな山里だった。長女がお寺を通じて連絡を取っていたお宅の前で「猪股」と書かれた表札に見入った。

玄関に入ると大きな居間が広がり中央に仏壇があった。壁に三人の遺影が飾られていた。写真の一人ひとりに見入った。割と新しめの五十代くらいの男の方の写真。私たちの祖母ちゃんくらいの年代の方の写真。さらにその上の先祖らしきおじいちゃん顔の写真。じーっと見入る。「父さんと似てる……？ ちよつと違うような……」などと私は思いを巡らせていた。私たちの探す手掛かりは父が養子縁組した時の戸籍謄本しか無い。それに記載されている父の両親の名前、祖父母の名前、双子の兄の名前しか無い。

出迎えてくれたのは猪股立さんという小さいお婆ちゃんだった。姉の話では電話で突然問い合わせた姉に対して親切に優しく対応してくれたとの事。父の先祖らしき猪股さん宅。しかし確定はしていない。まずは確認作業から入る。出迎えてくれたその方に手掛かりの名を言うが分からなかった。嫁に来たからあまり先祖の事は分からないという。家の裏に墓があるというので墓石に謄本に載った名前があるか見せてもらう事にした。二箇所あるそうだ。一つは先祖代々の古くからの墓。もう一つは地区の方々との共同墓地。まず裏山の先祖代々のお墓に次女と私が行った。

父と長女は猪股家に伝わる郷土史を出してくれていたので読んだり詳しく話を聞いた。私たちが向かった裏山はわりと険しい急坂だった。墓を見たがかなり年季が入っている。刻まれた年号が享保十七年とか天保七年とか江戸時代に遡る墓石が四つ並んでいた。古すぎるので手を合わせて次は共同墓地に向かった。猪股家の墓は三つあった。しかし手掛かりの名前は刻まれていなかった。戻って父と姉に告げる。父たちの方も郷土史に載っている内容は違うようだ。聞くと猪股姓は別な地区にも何軒かあり姓は同じだが親族関係は無いという。お世話になったこの猪股さんは住所が謄本の住所とは違っていた。ここではない事がハッキリしたのでお礼

を言い、先ほど通って来た道に戻った。

その地区が膳本住所の地区だった。記載の番地がある事を期待した。しかし八五番地は無かった。飛ばして前後の番地には家が建っていた。猪股姓を名乗る四軒の全てのお宅を訪ねた。応対してくれた皆さんから「分からない」という言葉が返って来た。一軒だけは留守だった。姉が再度、問い合わせたお寺に電話をかけ、今の状況を伝えると、引越したりした方々の共同墓地があるはずだからそれを尋ねてみてそこで分かなければもう術がありませんね、という事だった。共同墓地には猪股姓の墓石は四軒あった。全て見て歩いたが見つからなかった。ため息をつきながら思った。「もうこれ以上は探す術は全く無くなった」。それでも父は一つ一つ一生懸命に刻まれた名前を確かめ歩いている。黙々と……。

ある老人男性が墓の草取りとしていたので尋ねてみた。八八歳の現在までずっとこの地で生きてきた方だ。しかしこたえは「分からない」だった。全てが終わったと思った。ほかにもう探す術は無い。次女が言った。「確かにこの辺りにあったのよ。この辺りで父さんは生まれた。それがわかったんだから……ねっ」私は「うん……」とポツリと言った。父は無口だった。私は思った。父の故郷はこの山里だ。川の流れが響き渡り風が田んぼの穂をザワザワと揺らし、畑、野原もザワザワと揺らしているこの山里だと。私たちは車に乗り込み父の故郷を後にした。

父は養子に出されて八〇年過ぎた。八〇年経って生まれ故郷を訪ねたが知る人は一人も居なかった。もちろん父の両親は再会せず亡くなっている。双子の兄とは大喧嘩をしたつきり、今は行方も知らない。父は「両親に捨てられた」という思いを抱き八十路を過ぎた。父の胸中は到底私たちには測り知れない。

「私は何処から来て何処へ行くのか」とは画家ゴーギャンの言葉。それは私たちにも当てはまる。古来からそして現在も人類全てに共通した漠然とした疑問だと思う。

今回、母の三回忌での出来事だった。母の七回忌まではあと四年。その時父は八七歳になっている。元気に現在住んでいる長崎から青森へ行ける事を願いつつ日々楽しく行こうと思っている。